

これから

2013年2月に一般社団法人困窮者総合相談支援室 Hippo. という団体を、釜ヶ崎のすみっこで立ち上げた。もちろん、私一人で立ち上げるなど到底できない。すべては、この間、一緒にケースの支援にかかわってきた西成の社会資源と、理事になっていただいた、釜ヶ崎と関わりはあるが、「運動」をしていない、釜ヶ崎の中で「日常的」に働いていない人たちのおかげである。

私が、釜ヶ崎に来るようになったのは、1998年大阪市内で行われた一連の野宿生活者調査に参加する1年前なのでもう16年も前のこと。その当時、調査の現場責任者であった、大阪市立大学の島先生が「釜ヶ崎のことを考えるなら、釜ヶ崎で活動していない人を巻き込まないと…」と言っていたことを、今でも覚えている。そしてまた、その通りだと思っている。ようやく、動き出した。

立ち上げについても、綿密な計画をたててのことではなく、そういう時期が来て、必要に迫られて、押されるようにして、という表現が正しい。相談・支援に携わってからのことを、反省も含めて振り返ると、「無茶してきたよな…」と思うことだらけである。ただ、無茶できたのは、それを支えてくれる社会資源と Hippo. (ひぼ) のスタッフがいたからだと思っている。

ちなみに、ここでいう社会資源とは、精神科医、内科医、病院のワーカー、サポートイブハウスのスタッフ、訪問介護（ヘルパー・ケアマネージャー）、社会福祉協議会（あんしんさぼーと・コミュニティワーカー）、作業所・就労支援のスタッフ、福祉のケースワーカーなど（詳細は、「Hippo(ひぼ)とは <http://www.hippo.or.jp/about/>」を参照）。ただ、職種をあげているが、その職種であれば誰でもいいわけではない。「〇〇先生」であったり、「××さん」という、顔がみえる形での個人と個人のネットワーク（「絆」）なのである。この人たちに共通することは、まずケースのことを考えること、継続的にかかわってくれること、他の社会資源とも連携していること、他の支援者に対しても意見を言えること、以上4つ。この人たちと繋がることで、この人たちが持っているネットワークの中で、新たな社会資源に繋がることができ、広がる。また、自分でわからないことを、質問、相談することもできる。そして、支援方針がずれている場合、指摘、軌道修正をかけるための議論ができる。支援対象者にとっても支援者にとっても、ありがたいことである。

2000年頃から2009年頃までの釜ヶ崎からみた相談・支援については、「就労困難な人びとへの生活相談・支援活動の現状と課題」（『市政研究』164号 大阪市政調査会 2009

46-57 頁) や、「緩慢な自殺—支援の現場の声」(『生活保護受給者の生活と支援の現状—NPO 釜ヶ崎の福祉相談者の事例をもとに—』 大阪市立大学文学部社会学教室 2009 69-78 頁) に大きな流れは整理している。このあと、内閣府のパーソナル・サポート・サービスのモデル事業、西成特区構想、生活困窮者自立支援法と、この間の流れをまたどこかで整理して原稿を書かないといけないとは思っている。ただ、この数年でおきている行政主導の流れは、今までの支援の内容をきっちり振り返ることなく、混沌とした、めまぐるしいもので、これからどこに向かうのか舵の取れなくなった船に乗っている気分である。

ただ一つ言えることは、支援対象者が変わったということである。もともと、釜ヶ崎(あいりん地区)のカラーが濃い、日雇労働者や野宿生活者が大半だったのが、ここ 5 年くらい前から、日雇経験のない単身・高齢者であったり、派遣で働いていた若い人たちが増えてきた。釜ヶ崎が一般社会に近づいたのか、一般社会が釜ヶ崎に近づいたのか、わからないけれども、釜ヶ崎とは特別な街ではなく、一般社会が抱える課題(生きづらさ)を多く含んだ人たち(生活困窮者)がいる街になったということだ。

これからの釜ヶ崎(西成)は、特別な地域の特別な問題ではなく、日本が抱える課題＝「生きづらさを抱えている人たちが地域で安心して暮らせるか」に取り組む最前線のモデル的な街になると思っている。そのために、どのような支援、そのネットワークが必要か、もちろん既存の制度、社会資源の活用、さらには、あたらしい制度の構築、新しい人の流れ、考えなければならないことは山ほどある。大変ではあるが、楽しみでもある。

最後に、今まで協力をしていただいたみなさんに、ありがとうございますと、これからもよろしくお願いします、また、新しく興味をもって、この地域の来られる方々に、一緒にケースとかかわり、喜んだり、怒ったり、悲しんだり、楽しんだりしましょう。

2013 年 11 月 21 日

困窮者総合相談支援室 Hippo. (ひぼ)

尾松 郷子